

2018 4/24

No.2065

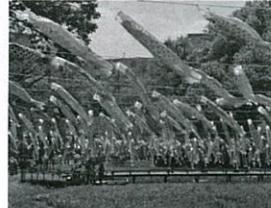
毎月第2・第4火曜日発行

# 政経 かながわ

一般社団法人  
—神奈川政経懇話会—



横浜市内を花と緑で彩るイベント「ガーデンネックレス横浜2018」のメイン会場の一つ「里山ガーデン」(同市旭区)の谷戸の菜の花畠エリアに、約300匹のこいのぼりがお目見えした。5月6日まで。



# 政経かながわ

2018 4/24 No.2065

## contents

視点・点描 3

地価左右するまちづくり

まつりごと点描 4

政権不信の連鎖拡大

自民党内に危機感

経済 6

世界に通用するリーダーの条件

情報、語学で求められるもの

企業最前線 8

訪日客狙い滞在型ホテル拡充

客室内にキッチンや家具

くらし2018 10

社会的ジェットラグに注意

広告珍談 12

広告はたのしい⑫

船マニアの随筆家

NNAアジア経済リポート 13

神奈川景気データファイル 14

神奈川景気データファイル 15

### 事務局だより

◇2018年5月定例講演会

2018年5月16日（水）

午後1時30分～3時

崎陽軒本店4階「ダイナスティー」

講師は共同通信社前平壌支局長の磐村和哉さん

演題は「急変する朝鮮半島情勢／南北—米朝首脳会談の評価と展望」

# 視点



## 地価左右するまちづくり

神奈川最南端の城ヶ島や三浦海岸、油壺といった観光地に加え、農水産物に恵まれた三浦市。気候も温暖で、住環境としては最適なこの3地点を含めて下落率が大きな地域の地価下落が著しい。

国土交通省が3月に公表した公示地価（1月1日現在）によると、三浦市の住宅地はマイナス5・1%。市の3地点が下落率の県内ワースト3を占めた。県内の平均だ。

変動率がプラス0・1%と2年ぶりの上昇に転じただけに、落差が激しい。

不動産事情に詳しい関係者によると、これまで最も寄り駅から徒歩15分圏内の物件ならまずまずだったが、最近は10分圏内ではない

と関心を示されないという。都心の京急線三崎口駅やJR線衣笠駅から離れた相模湾側が多い。都心へのアクセスの悪さが響いたよう

加えて、計画的なまちづくりへ

地価の下落は税収にも関係するだけに、自治体にとって深刻な問題だ。人口減を食い止め「住みたくなるまち」にするためには交通アクセスや生活環境、住民サービスなど幅広い分野で魅力を高める必要がある。小手先でない、トップの手腕が問われている。

（神奈川新聞社経済部長

佐藤 浩幸）

一方、住宅地で上昇率1位となつた横浜市港北区の綱島東地区は2022年に新駅開業が予定されている。10位以内に入った相模原市緑区の橋本地区は27年のリニア中央新幹線神奈川県駅（仮称）の建設工事が進む。同じく川崎市多摩区の登戸地区は、複々線化で輸送力が向上した小田急線の登戸駅の近く。いずれもアクセス向上への期待が地価上昇につながったとみられる。

の期待も大きい。綱島東地区にはパナソニックの工場跡地を再開発して、大型商業施設や水素ステーション、米IT大手アップルの研究所、慶應大の国際学生寮などが立地する。橋本駅周辺は、リニア新駅整備のため移転する県立相原高校跡地の再開発計画が進む。登戸駅周辺も区画整理事業が予定されている。総じて、企業や行政の主導による計画的なまちづくりが周辺地域の魅力を高め、価値を引き上げているといえる。

## 船マーニアの隨筆家

「綺麗な新造船になるべく早く乗つて見たいとも思うし、乗れるにきまつて見たいとも思うのである。だけ遅い方がいいとも思つた」と、内田百閑。

勝手なことを書くのは内田百閑。軽妙な文体で知られる隨筆家。船マニアであり、日本郵船の顧問。だから郵船のフネには、たびたび乗つた。もちろんタダ。著書『船の夢』(1941年・那珂書店刊行)から、その場面を抽出しよう。

「夕方の窓や甲板の所々から洩れる薄明かりの中に、そそり立つた鎌倉丸の舷を見上げると大きなお城の様であり、黒雲のかたまりの様にも思われる」と。日本郵船の代表的な客船『鎌倉丸』が、横浜に停泊していた。もと秩父丸であったが、宮家の秩父丸

宮におそれおおいと改名。『浅間丸』《龍田丸》の3姉妹船である。ある日、「新造船新田丸の披露航行に私も乗せて貰う事になつた」。「豪華船という触れ込みはあつたけれど、全体の印象は絢爛といふよりも簡素である。金碧の色でなく白くて明るかつた」。

その日、『新田丸』は名古屋に停泊。深夜、市内から戻ろうと。「新田丸のイルミネーションが暗い波の上に大きな光りの塊りになつて輝いている」。新田丸は冷房完備。

「外を歩いていて暑くなると部屋に帰つて一服すれば、いつの間にか涼しくなつている」という気持ちを私は賞玩して、なんにも用がないのに部屋を出たり入つたりした。

の前に「きらきら光る海波が流れ、その上に船体の上部を純白に塗った大きな船が浮かんでいた。満船飾の小旗が一枚一枚美しい朝日を浴びてひらひらしている。今ごろ着いた様子ではなく、もうずっと以前からさうしてそこにいたらしく澄まし返つてゐる」と。

郵船の客船『八幡丸』が停泊していた。

瀬戸内海を航行。「きらきらする灯火のかたまつた岸が遠くに見えたり、草餅の様な形をした小さな島が水明かりの中に浮かんで、その頂きに光つている灯台の灯が手すりから乗り出している鼻の先をこすつて行くように思われたりした。どうかすると漁り火が行く手の暗い波間に貝殻を撒いた様に散らかつてゐる中を大きな舳先が分けて行くこともあつた」。

長崎に着くとまた鎌倉丸がいた。

(美術工ッセイスト、茅ヶ崎市在住)

(図) 1940(昭和15)年3月、就航した日本郵船の「新田丸」

八幡丸に乗りかえた。「いつの間にか夜になつて、暗い海の向こに八幡丸の船体が大きい白い夢のかたまりの様に光りだした。美しい灯影が流れて行く海峡の浪に乘つて、どこまでも長く筋を引いた。中に入つて行つて寝るのが惜しい様な気がし出した」

